



Peter Post; and Elly Touwen-Bouwsmas, eds. *Japan, Indonesia and the War-Myths and Realities*. Leiden: KITLV Press, 1997, Glossary, Index, xii + 214p.

本書は1994年アムステルダムとライデンで開催された「インドネシアにおけるオランダと日本統治の遺産、神話と現実」をテーマとして、日蘭研究ワークショップに提出した論文を編集した研究書である。オランダ側から編著者の他に Bas Pompe 氏、日本側から後藤乾一、佐藤繁、倉沢愛子、疋田康行、柴田善雅氏等が寄稿している。

この研究グループのユニークな点は日本研究者がオランダに集まり、日蘭研究者が初めて合同でオランダ植民地統治と日本軍政統治がインドネシアに及ぼした影響を討論したことである。その結果、1930年代から50年代にわたるインドネシアの変革に更なる理解が深められた。

これまでに行われてきたインドネシア史研究は蘭印時代、日本占領期、戦後革命期と個々に時代区分をして、三者間の相関関係に注目しなかった傾向があった。収録された各論文は伝統的アプローチを乗り越えて、日本占領期を蘭印期とインドネシア戦後史の流れの中でどの様に位置づけるか、また日本占領はインドネシアの長期的な変化の過程で必要な時代であったという認識に基づいて執筆者は分析を行っている。

70年代末葉までインドネシアの日本占領史は政治的变化、エリート形成に焦点があてられてきた。本書ではそれ以外の経済的、社会的変容に、占領期研究に新たなアプローチを試みている。

新たなアプローチの例として、戦前、戦中期の日本企業の進出とそれがインドネシア企業形成に与えた影響、両時代を通して変容した人種間関係、経済の変化、社会、政治、経済変貌の主要なアクター（農民、官吏）等の分析が必要であると編集者は論じている。

以下に、本書所収の論文を掲載順に概観することにする。

後藤氏は蘭印統治と日本軍政統治スタイル、両者が社会、文化、経済に及ぼした影響の比較、占領統治のダイナミックな遺産、日本における東南アジア占領歴史観などを紹介している。

後藤氏はスカルノの対日観について興味ある推測を試みている。スカルノとハッタは43年11月アジアの独立国首脳が会同した大東亜共栄圏会議に招待されず、その後、訪日した時も日本政府からインドネシア独立の確約を得られなかった事を深く恨んだ。そのせいで、バンドン会議で12年前にアジア独立国首脳会議が開催された事実に触れなかった。この推測が正しければ、スカルノの対日観に新しい側面を垣間見る興味ある観測である。

軍政下のユーラシアン政策（タウエン＝バウスマ）、軍政下の司法制度の変革とその影響（ボンベ）、30年、40年代のプリプミ企業エリートの形成（ポスト）論文はこれまでの日本側の占領史では研究されていなかったテーマである。その意味でこれ等三つの論文は日本側研究者にとって有益である。

タウエン＝バウスマ氏はインドネシア人とユーラシア人間の種族紛争、流血事件発生に軍政のユーラシアン政策がどの程度まで責任があったかを分析している。彼は両種族の緊迫関係は軍政側の意図的政策の結果起きたものではないとしながらも、対ユーラシアン分割統治政策が彼等のアイデンティティーと民族性を高めることとなり、他方、終戦直後高揚しつつあったインドネシア人の民族意識とユーラシアンの民族意識とが衝突して起きた流血事件であると論考している。

インドネシアだけでなく、マラヤでも軍政当局は当初から一貫した種族政策はなく、場当たりの対応策をとっていたのであるから、故意に人種紛争を招来させたというこれ迄の結論は理論的に無理である。両種族間紛争の責任が日本にあるとすれば、占領によってこれまで優位にあったユーラシア人の地位が低下し、相対的にインドネシア人が優位となったことである。戦後、後者の高揚した民族意識と相俟って、前者との人種紛争がおきたのだというタウエン＝バウスマの結論は至当である。

軍政監部は蘭印時代の差別的人種的二重裁判所制度を改変し、司法制度を統一した。この改革の影響を占領期と戦後に書かれた著名な判事スポモの論文

を比較してポンペ氏は改変の功罪の評価を試みている。

軍政時代には統一化された司法制度の下で同一の初審裁判所で全ての人が裁かれることになった。また、多くのインドネシア人判事が昇進の機会を得たり、現地人判事が最高裁判事に任命される程、司法制度が変革した。

しかし、司法制度改革の目的はインドネシアの政治エリートの協力を得ることであり、改革は司法制度を弱化する結果となった。抑留されたオランダ人判事不足を補うため、軍政監部は速成の司法要員養成所を設置して司法要員を養成したが彼等の資質は不十分であった。

弱体化した司法制度は戦後70年代まで存続し支障をきたし、養成所で研修を受けた司法要員が戦後長期間にわたってジャワ島の判事職を支配した結果、外島の判事達はジャワの裁判所に任命されなかったという人事管理問題に弊害を及ぼした。

ポスト論文は戦前、占領期にインドネシアに進出した日本企業がプリブミ企業形成にどの様に貢献したかを考察している。

戦前、ミナンカバウとパレンバンの企業一族は日本・蘭印交易に参加し、日本とのコネクションによって外国貿易の知識と技量を得た。占領期には軍政当局はプリブミの経済活動への参加を優遇した。また日本の経済政策施策者は組合組織により、戦前の各種族別経済構築を排除し、各種族の企業グループを統一し統制経済を制定した。しかし、種族統一経済政策、プリブミ経済優先政策は華商の経済優位を切り崩すことは出来なかった。しかし、日本は20年代以来プリブミ企業エリート形成に有益な役割を果たしたとポスト氏は高く評価している。また、戦時中、進出した日本企業はプリブミ企業家との人脈を活用し、戦後の企業進出を容易にした。

疋田論文は軍政期に南方地域に進出した日本企業の活躍について論考し、ポスト論文を補完している。

「経済対策要綱」(41年12月6日決定)に基づいて、日本政府・軍部は戦略資源の獲得を決定した。この「要綱」に副って、軍部は進出企業の選択を行った。戦前から東南アジア各国との投資、開発、交易に実績のあった財閥系大・中企業が優先的に選

択された。

しかし、軍部、特に南方総軍は開戦前財閥系企業の進出に反対していたといわれるが、この政策転換の経緯について疋田氏は触れていない。更に、中・小企業進出には利権漁りを繞って裏面工作の暗躍が軍部と企業間にあった。疋田氏にこの問題に解明のメスを入れて欲しかった。

倉沢、佐藤両氏の論文は米穀・食糧問題について論考している。

両氏共ジャワの米穀・食糧不足は軍政監部の配給管理制度、強制的供出、陸上、海上輸送機関の不備に問題があったことを指摘している。倉沢氏は軍政監部が米の供出を各農村単位に割り当て、収穫後公定価格で米を買いあげた結果、農民は出し惜しみをしたり、闇市場に横流ししたりしたため米不足が深刻化したと考えている。

加えて、食糧管理局と農村の中間的存在であった現地人官吏(Pangreh Praja)は強制的に割り当てられた供出目標が達成出来ないことを恐れ農村に水増し要求をしたことで、益々米の供出状況が悪化したと佐藤氏は考察している。

また、戦争末期には兵員・軍需物資の輸送が優先となり、米・食糧輸送は更に困難となり、米不足に拍車をかけた。

占領期に「ビルマ地獄、ジャワ天国」といわれる位、ジャワは食糧、物資が豊富といわれていた。しかし、倉沢論文はジャワでは米不足が深刻であり、飢餓が広範囲に拡がっていたことを立証している。その原因が軍政監部の強制的供出制度、運輸政策の欠陥に起因するものであると同氏は指摘している。

佐藤氏は軍政下の経済破綻——米・食糧不足——インドラマヌ暴動は軍政監部がジャワ経済を搾取したことが起因ではなく、むしろジャワ経済の取扱いを間違えたことにあると論考している。

この様な状況の下で、軍政監部と農民の間に位置していた官吏達はこれまで軍部の手先となって農民を搾取したり、私腹を肥やしていたと非難されてきた。佐藤氏はこの定説を新資料によって、官吏側の立場から官吏達の対軍政監部、農民関係を分析している。

彼の評価によれば、これまでの定説は偏見のであり公平を欠く批判であると説明している。彼等は両

者の板ばさみに会って、農民から軍政監部の協力者と烙印され後者の憎悪的となった。むしろ、官吏達は履行不可能な軍部の要求と怒りに燃えた農民の間にはさまれた犠牲者であると佐藤氏は考察している。

佐藤論文は実証的に研究されなかった官吏の立場を再考したことで高く評価されてよい。

南方開発金庫（南発）の研究はこれまであまり研究されなかったのが現状である。柴田論文は占領下のインドネシアでの通貨政策の一端を知る意味で有益である。

占領後、軍は敵性銀行を仮差し押えし、横浜正金銀行、台湾銀行が先ず銀行業務を開始し、三井、華南銀行が続いて操業を始めた。軍はギルダールと等価とした軍票を通貨として流通し、43年3月軍票使用が停止されるまでに流通した軍票は3億5,300万ギルダールに達した。

一方、政府は南発を進出日本企業の資源開発資金調達機関として設置した。インドネシアではジャカルタに支金庫、スラバヤ、セレベス、セラムに出張所が設けられ、43年4月に南発は社債を発行した。これ以後、南発券は軍票に代って占領地域の通貨となった。終戦後も46年3月まで英軍は南発券を通貨として流通させた。またインドネシアも独立当初南発券を法貨として使用していた。

本書は日本、オランダ側研究者が参加して研究成果を纏めたものであるが、欲を言えばインドネシア研究者の参加が望ましかった。

日蘭研究者が新しく発掘した史・資料を駆使した研究成果はインドネシア軍政史に新たな光を与えるであろうし、両国の研究者に多くの示唆を与えるであろう。将来日蘭の統治比較研究だけでなく、満州、朝鮮、台湾、中国における植民地統治、ドイツの植民地統治等の比較研究が行われることを望んでいる。それによって、日本の軍政統治の性格がより明確となるであろう。

執筆者達は戦後生れの研究者であるだけに、占領期研究に特別な感情を抱かず、また特定の思想にとらわれず、客観的に事象を分析している。そのためか、全体的に論争的論評が見られず、少々物足りない読後感が残る。

編集者によれば本書は占領期のインドネシアに焦

点を置くと述べているが、記述の大部分がジャワに集中しているため、本書のタイトルは不適當な感じがする。

一、二点誤認と誤訳があるので指摘しておく。クラ鉄道の正字はKraであり、同鉄道建設地区はマレーシア領ではなくタイ領である（120頁）。造船局の英訳はShipbuildingの方が適訳である（同頁）。

（明石陽至・愛知淑徳大学）

Daniel S. Lev; and Ruth McVey, eds.
Making Indonesia: Essays on Modern Indonesia in Honor of George McT. Kahin. Ithaca: Cornell Southeast Asia Program, 1996, 201p.

1996年、コーネル大学東南アジア・プログラム創設者のひとりであるジョージ・ケーヒンの功績を讃える論文集が刊行された。ケーヒンは、『インドネシアにおける民族主義と革命』という「古典」を記し、戦後のインドネシア研究を切り拓いた。¹⁾ その後はインドネシア研究だけにとどまらず、東南アジアの国際関係に関する話題作をつぎつぎと刊行してきている。²⁾ ケーヒンのもと、コーネル大学は戦後アメリカの東南アジア研究を主導し、その中核にインドネシア研究があった。

主題「インドネシアを作ること」(“Making Indonesia”)は、「インドネシアを構成するもの」を意味する“Making of Indonesia”とは明らかに異なる。³⁾ 本書は、「インドネシア」を構成する政治・経済・文

1) *Nationalism and Revolution in Indonesia* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1952)。

2) ケーヒンの主要作品として、ここではつぎの2点のみをあげておく。*Intervention: How America Became Involved in Vietnam* (New York: Korf Press, 1987); *Subversion as a Foreign Policy: The Secret Eisenhower and Dulles Debacle in Indonesia* (with Audrey Kahin) (New York: Korf Press, 1995)。

3) 後者の視点から編集された論文集として、J. A. C. Mackie (ed.) *Indonesia: The Making of a Nation* (Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University, 1980) がある。

化的要素には関心をもたない。構成物を重視する視点にたつと、「インドネシア」が歴史的な「自明」として存在するかのような誤解をあたえかねないからである。これに対して、本書は、「インドネシア」を歴史的形成物とし、いまだに形成過程にある実存としてとらえようとしている。

本書の底流となっている主旋律は、マクヴェイの導入的エッセイ「巨獣の構築」が明示しているように、「現代インドネシア」をいかに理解するかという点にある。20世紀に誕生した「インドネシア」とはなにか、「インドネシア」にとっての「近代」とはなにかという問題意識が、各論文に多かれ少なかれ共有されている。とくに、「インドネシア」の国家と社会、民族と国民を形成している歴史的背景と拘束性、そしてその展開に、焦点が当てられている。

本書は9本の論文からなっており、それぞれの論文は、大まかに時系列的に並べられている。以下、本書構成にのっとり、各論文を簡潔に紹介したい。

アンダーソンとムラゼクは、オランダ植民地期のナショナリズム現象を扱い、「インドネシア民族」の形成に迫っている。アンダーソンの「言語・ファンタジー・革命」は、激動の時代における、ジャワの世界観の「近代」との対峙を論じる。鉄道や新聞という「近代的」制度が、ジャワ人の時間・言語観に革命的变化をもたらした。新聞に代表される出版資本主義は、選挙、指導者、階級闘争、権力、集会などの新しい政治的言語を「インドネシア」に広め、定着させた。こうして20世紀前半、インドネシアに「近代」という「革命的」状況が生まれた。エリート民族主義者シャフリルは、このような時代潮流のなかで生まれ育った。しかし、かれは1935年に、植民地期に強制収容所として名高かった西ニューギニアのボーヴェン・ディグールに流刑された。「ボーヴェン・ディグールでのシャフリル」で、ムラゼクは、インドネシア政治史上におけるボーヴェン・ディグールの意義を、シャフリルの「眼」をとおして描いている。現実政治や人民から隔離された「普通の」生活空間で、シャフリルは「非政治的」手紙をオランダ語で記し、「西洋近代」と植民地下にある「封建的東洋」について思いをめぐらせていた。そして、7年にわたる「流刑」の身から解放された後、か

れは現実政治に身を投じ、独立インドネシアの政治的指導者の一人となってゆく。

1945年8月17日の独立宣言後、インドネシアは対オランダ独立戦争期に突入した。1940年代後半の政治指導者の格闘については、ハーヴェイとヘイドゥスが、外交とバンカ島の動向から分析している。ハーヴェイは、「インドネシア民族革命における外交と武装闘争」のなかで、ヴェトナムの対フランス革命・戦争体験と比較しつつ、インドネシアがオランダとの全面戦争ではなく、交渉による解決を選択した経過を見ている。民族主義運動自体における急激な社会革命の否定、政治指導者間の分裂、社会の多様性、アメリカの外交プレッシャーが、主たる要因であった。他方、独立宣言時に副大統領であったハッタは、1948年、オランダによってバンカ島に流刑された。しかし、ヘイドゥス論文「我々の若かりしころ」が明らかにしているように、バンカ島でのハッタは、主権獲得のための交渉の席についていたシャフリルら同僚たちと定期的な連絡を取り合っていた。ここが、外部の政治勢力との関係を遮断されていた、植民地期の強制収容所と様相を異にする点であった。そして、外交努力の結果、1949年、インドネシアは主権を獲得する。

1950年代から60年代は、独立後のインドネシア政治がもっとも活気に満ちた時期であり、それはPKI（インドネシア共産党）抜きに語ることはできない。マクヴェイの「インドネシアの共産主義における民族主義、革命、組織」は、当時大勢の若者を惹きつけたPKIの魅力を語る。そこでは、PKIの組織と組織化に具現化された「近代性」とそれが有する一種の宗教性、「共同体」として機能していた党の存在感が指摘される。しかし、1965年のクーデター未遂事件とその後の反動によって、PKIは壊滅状態に追い込まれ、党員とシンパはインドネシア全土で虐殺された。バリ島は、虐殺がもっとも徹底的かつ残酷におこなわれた代表的空間であった。「クーデター後バリでの虐殺」で、ロビンソンは、バリの文化的要因による説明を退け、バリ島での虐殺は、PKIをめぐるバリにおける政治闘争とそれに便乗した国軍が引き起こしたものであったと議論する。

大量虐殺という恐怖の記憶のうえに、スハルト「新秩序体制」は誕生した。新秩序体制は蘭領東イン

ド植民地国家の伝統を引き継ぎ、各種ルールの法制化と官僚組織の充実とを図った。レヴ論文「国家と社会の狭間で」は、社会の側面から、法律家という専門職の役割を強調している。かれらは、新体制下において成長しつつある「都市中間層」の代弁者となり、「民主化」促進の一翼を担う。これに対し、白石の「インドネシア国家の再配線化」は、ハビビの台頭と官僚帝国の形成を科学技術の重要性の増加と並列して論じる。そこでは、開発政策のもと、国家の安全保障戦略の一環として科学技術が認識され、それを支える組織、思想が、過去20年間の新秩序体制下の社会に浸透してきており、変容しつつあるインドネシア国家の姿が指摘される。ところが、変容しているのは国家ばかりではない。バンネルたちが「コミュニティ・レベルの参加、土着のイデオロギー、活動家の政治」で示唆しているように、社会も同時に変容しているのであり、1990年代にはすでにNGOの重要性を無視できなくなっている。しかし、NGOの役割は、組織の目的によって異なり、そこには対立が生じることもある。ジョクジャカルタのコミュニティ開発を担うベセスダ病院の活動は、かならずしも政治的問題に積極的にかかわっている法律援助会(LHB)と同一視できるものではない。とはいえ、NGOの活動は、容易に国境を越え、国際的なNGO組織と共同歩調をとり、情報交換ができるという強みがあり、それがインドネシア社会変革へも少なからず影響をおよぼすことは確かである。

以上の要約からもわかるように、本書は、網羅的ではないにしても、20世紀におけるインドネシア政治史の展開を見事に表わしている。しかし、本書には共通の問題意識があるとはいえ、各論文の問題設定、アプローチはけっして統一されてはいない。むしろ、論文ごとに、それぞれの「インドネシア」が描かれている。ところが、個々の論文にはつながりがないとはいえ、全体からはぼんやりと「インドネシア」が見えてくる。

それは、端的に言って、「インドネシア」とはさまざまな顔をもった対象だということである。そして、「インドネシア」がすでに確固なものとして確立されたものではなく、いまだに形成過程にある姿が浮かびあがってくる。「近代」とは、既存の枠組を変える意識、運動、空間であったし、いまでもそうで

あることには変わらない。つねに変革の「過程」にあるからこそ、一つの「インドネシア」像を描きだすことにはあまり意味がなく、「過程」にあるからこそ、多様な「インドネシア」が存在する。重層的で多元的な「インドネシア」には、異なる位相があり、さまざまな「層」が刻み込まれており、それらが「インドネシアを作って」いる。

しかし、本書は「インドネシア近代」の抽出に主眼をおいているために、「伝統」の側面が若干疎かになっている。反植民地ナショナリズムがそうであったように、独立後の国民国家形成過程で、「古き」伝統に新しい意味があたえられ、しだいに国家・民族の「伝統」と化してゆく。そうした新しい「伝統」も、時が経つにつれ「伝統」として「忘れ去られる」。ここにも、20世紀インドネシアにおける、時代とともに変化する「伝統」の姿を認めることができる。「伝統」も「近代」の産物となっている。⁴⁾

植民地期ナショナリズム、独立後のPKI、そしてスハルト「開発体制」は、「インドネシア」という「未来」を見つめる巨大な「近代化」プロジェクトを具現化してきた。しかし、その歩みは、ポーヴェン・ディグールやPKIを「否定」した大屠殺などによって中断され、軌道修正を余儀なくされた事実は見逃せない。21世紀を眼前にして、「インドネシア」はどこへ向かおうとしているのか。インドネシアで「一つの時代」が終焉をむかえたいま、「巨獣」インドネシアの「国家」と「国民」が歩んできた道を振り返る意義はますます高まってきている。

(山本信人・慶應義塾大学)

Peter Bellwood. *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Revised edition. University of Hawaii Press, 1997, 384p.

本書はオーストラリア国立大学考古学科において考古学Readerの職にあるベルウッド(Peter Bellwood)による東南アジア島嶼部、特にマレーシアおよびインドネシアを主たる地域とした考古学の

4) たとえば、Henk Schulte Nordholt (ed.) *Outward Appearances: Dressing, State & Society in Indonesia* (Leiden: KITLV Press, 1997) 所収の諸論文を参照。

概説書である。彼はインドネシア、マレーシア、最近ではラオスをフィールドにして調査を行っている。また東南アジア・インドの考古学に関する学会、Indo-Pacific Prehistory Associationの事務局を担当している。1985年に初版が出版され本書はその改訂版である。1980年代半ばまで東南アジア考古学の概説書はまったくなかったのが、初版が出版されたときは東南アジア考古学もようやく体系化が行われるようになったかという印象をもったことを記憶している。80年代後半はベルウッドの初版に続いて、東南アジア大陸部の概説書も出版され (Charles Higham: *The Archaeology of Mainland Southeast Asia*. Cambridge University Press. 1989), ようやく東南アジア全域について体系化が行われた。島嶼部のベルウッドはイングランド出身でオーストラリア在住、大陸部のハイナムはスコットランド出身でニュージーランド在住と、東南アジア考古学の概説書を著したふたりがイギリス出身でオセアニアに在住する考古学者であることはおもしろい。

本書の内容は多岐に亘る。とりわけ、東南アジア島嶼部は大陸部とは異なり、考古遺物の型式学的編年が非常に難しいことから、考古資料だけでは歴史叙述が困難なため、言語学を含む他分野の研究成果を積極的にとり入れている。初版出版後12年が経過したので、当然改訂すべき部分や新しく加わった部分がある。本書を読むさい、最後の部分である「まとめ」を先に読むとベルウッドが抱えている問題点がはっきりする。考古学的事実と民族移動、居住をいかに関連づけるかという考え方が本書の中ずっと流れている。この書評は私が関心をもっている部分を中心に述べたい。

東南アジアに人類が居住し始めたのは、ジャワ中部、トリニールやサンギランで発見されたピテカントロプスが最初である。原人の時代は前期旧石器時代とされる。当然、原人が残した考古遺物があるはずだ。ところが初版当時は前期旧石器といわれてきたものが近年の調査結果により否定されるものが続出している。マレー半島ではタンパニアン石器が3万1千年前のトバの火山噴出物で封じ込められており、後期旧石器であることが確実となったし、ジャワのパチタニアンも後期旧石器である。また人類進化についてもこれまでいわれてきたような猿

人、原人、旧人、新人という一系列的な進化ではなく、旧人(ネアンデルタール人)は現生人類への進化過程からはずれたものであることが明らかとなっている。大陸部でも状況は同じである。東南アジアの化石人類と前期旧石器問題は今後も揺れ動くことだろう。

ベルウッドが本書で一番述べたかったことはオーストロネシア人の移住の問題である。東南アジアの後水期の新石器文化であるホアビニアンと完全磨製石斧および土器、農耕、オーストロネシア人の移住に関する問題について、ベルウッドは興味深い見解を述べる。半島マレーと島嶼ではホアビニアン、あるいは土器をもたず、刃部磨製石斧をもつ文化が長く続いたが、前3000年ころから土器と完全磨製石斧が広がり、ホアビニアンとそれ以後の文化、つまり後期新石器文化とのあいだにギャップがみられることを指摘する。そのうえでこの断絶を北からの新たな民族、つまりオーストロネシア人の移動にともなう現象として理解する。前4000年ころから大陸部でも広く土器と完全磨製石斧が現れ、同時に居住域の変化、洞穴居住から平野部への移行という現象がみられる。大きな画期であったことはまちがいない。この現象とオーストロネシア人の移動とを関連づけ、中国南部から前4千年紀に台湾へ移住した人々の中からマラヨ・ポリネシア・グループが枝分かれし、前3千年紀にフィリピンへ、さらに前2000年までにはフィリピン、ボルネオ、モルッカへ拡散したとの雄大な仮説を立てている。その過程で、最初に中国南部から米とミレット農耕をもっていたことから、拡散の第2段階で各地の自然環境に適応して穀物から根菜農耕へ転換する場面があったことを強調する。ふつうは根菜から稲作へという過程を考えがちだが、ベルウッドは環境適応による転換と理解する。浙江省の河姆渡遺跡などの稲作農耕を起源と考える以上こういう結論になるのだろう。

島嶼部での金属器技術の始まりについては大陸部からの伝播と考え、前200年以降と推定している。また、青銅器と鉄器とは同時存在であったことを述べる。ベルウッドのいうように、この地域の青銅器には銅鼓と現地鑄造と考えられるもの、例えばフラスコ形青銅器、鐘、大型青銅斧があるが、いずれもレガリア的な青銅器である。一方で鉄器は農具と武

器などの実用品であり、明確に用途が分かれている。このことはすでに鉄器導入後の金属のあり方だろう。鉄器製作は大陸部から導入され、当地で独自に発達したとする。またマレー半島からモルッカに至るインドネシア島嶼に1式銅鼓が分布するが、型式学的年代より実際にもちこまれた時期はずっと遅れることを述べる。型式学的年代とのずれをどう解釈するかは考古学的に厄介な問題であるが、島嶼部ではそのとおりであろう。最近銅鼓空白地域であったサバ北部の孤島で銅鼓が出土したが、鼓面が円形でない点を除けば1式銅鼓そっくりの銅鼓である。ところが一緒に出土した土器の型式学的年代からは10世紀ころとされるものであり、ベルウッドのいうような問題は想定しなければならない。

初版出版時にもふれられていたが、インドとの接触の問題がある。東南アジア各地からインド産の考古資料が出土している。特にインド産の土器の出土は年代的に確実におさえることが可能なために重要である。ジャワ北西部のブニ遺跡やバリ北岸のスムピラン遺跡からインド南部産の回転紋土器が出土している。インド、中国との関係については大陸部でもチャンパの遺跡やベトナム南部の諸遺跡から出土するスタンプ紋土器との関係で話題となっている。インド化、中国化といった古くからの問題を現代の問題にする話題である。西ジャワとインドとの交渉は、最古のサンスクリット碑文、プールナヴァルマン碑文により5世紀には確実であるが、回転紋土器はさらに古く、後1世紀にはインドとの交渉があったことを示すものである。ところがインド産のビーズを出土した西タイのバンドンターペット遺跡や、ホーチミン市南部のゾンカーヴォ遺跡でのC14年代値が前1千年紀前半～半ばという古さを示すために、ベルウッドはインドとの交渉の開始をそのころまでさかのぼらせているのは評価できない。両遺跡とも後1～2世紀の遺物をもつので、従来どおり回転紋土器の年代観、後1世紀以降でよいと思う。ベトナム中南部の近年の調査でもインドよりは中国との関係が初期には深く、後漢との関係を示す土器が出土している。むしろベルウッドの考え方で興味深いのは、インドとの交易活動の活発化により島嶼部どうしの交渉も生じ、その結果として初期金属器時代の島嶼部の土器が広範囲に同じ特徴を示すといっ

ていることである。

年代的にかなり明確に分かる大陸部とは異なり、島嶼部はひとまとめにできない複雑さがある。マレー半島、ジャワなどと、インドネシア東部の島々とは考古学的展開が大きく違っている。そのため体系化して記述するのは大変な苦勞がある。年代の判断に困る資料が多く、インドネシアの研究者のなかには我々なら時間的な違いと解釈する型式的な違いを、民族的な違いと解釈するという方法的な差もある。ベルウッドの本書はその困難さを承知のうえで記述されたものである。彼が記しているように、本書はひとつのモデルを提起したものであり、これからの研究の案内をなすものであり、将来の調査研究により変えられるものである。東南アジア考古学に関心をもつ人だけでなく、この地域に関心をもつすべての人にお勧めしたい。

本書と合わせて、ハイアムの前著および最近出版された *The Bronze Age of Southeast Asia* (Cambridge University Press, 1996) も読まれることをお勧めする。また1998年には日本の研究者の手になる東南アジア考古学の概説書(坂井隆・西村正雄・新田栄治『世界の考古学・東南アジア』同成社)が出版されるので、日本人研究者の見解とも合わせて比較するとおもしろいと思う。

(新田栄治・鹿児島大学)

Anthony Milner. *The Invention of Politics in Colonial Malaya: Contesting Nationalism and the Expansion of the Public Sphere*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994. vii + 328p.

本書は、植民地時代のマラヤにおけるマレー政治思想史研究に、新たな分析視角を取り入れようとする意欲的な作品である。著者のアンソニー・ミルナーは、マレー語史料の綿密な読解に基づいたマレー社会の政治文化の研究に一貫して取り組んできた歴史学者として知られている。ミルナーの前著『クラジャアン』¹⁾は、ナマ(nama, 名声)を高める

1) Milner, A. C. 1982. *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*. Tucson, Arizona: The University of Arizona Press.

という動機のもとに、儀礼的で象徴的な権威の中心であるラジャ (raja, 王) 個人に臣下が忠誠を誓っている状況が、植民地化以前のマレー王権社会の本質だと結論づけた。前著の続編といってもよい本書で問われるのは、植民地時代のマラヤのマレー社会において、どのようにして、前近代的性格を持つクラジャアン (kerajaan) の政治文化が掘り崩され、近代的な「政治」——自由かつ理性的な個人からなる公共社会のなかでの利益の追求をめぐる多元的主体の競争的活動——が創造されていくのか、ということである。

ミルナーは、ウィリアム・R・ロフ (William R. Roff) の『マレー・ナショナリズムの起源』²⁾をはじめとする先行のマレー史研究が、ナショナリズムの発展史を跡づけるという目的の下に、マレー社会におけるイデオロギー的な統一や合意の側面に関心を集中させていたことの問題性を指摘する。著者が提唱するのは、ナショナリズムを相対化し、マレー社会におけるイデオロギー的な分裂や論争の側面に光を当てることである。

本書では、各章ごとに1ないし数編のマレー語文献の分析を中心に議論が展開される。著者が意図するのは、個々のテキストの中に見られる言語表現に細心の注意を払うとともに、個々のテキストを過去や同時代のテキストとの対話関係 (相互テキスト性) において理解し、各テキスト間のイデオロギー的な連鎖をつかみとることにほかならない。本書で取り上げる諸テキストの総体が構成しているのは、ラジャへの忠誠に依拠するクラジャアン志向、マレー民族にアイデンティティの基盤を置くバンサ (bangsa) 志向、イスラーム共同体への奉仕を説くウンマ (umat) 志向という、植民地時代のマラヤのマレー社会における共同体概念をめぐる主要なイデオロギーのあいだの三つ巴の論争である。ミルナーは、これらのイデオロギーの間に存在する相違をふたつのレベルに分けて考えようとする。すなわち、個々のイデオロギーの具体的な主張に関わる problematic なレベルと、そうした主張の根拠となる問

題設定や正統性原理に関わる thematic なレベルという、ふたつの層に分けて、植民地期のマラヤにおけるイデオロギー的論争を理解しようというのである。

本書の第1章から第5章までのところでは、19世紀中頃から20世紀初頭にかけて、西洋のリベラリズムの強い影響のなかで展開されたバンサ志向の議論が分析される。取り上げられるテキストは、アブドゥッラー・アブドゥル・カディール (Abdullah Abdul Kadir あるいは Munshi Abdullah) の自伝や旅行記 (第1・2章)、イギリス人のプロテスタント宣教師ベンジャミン・キーズベリー (Benjamin Keasberry) が出版した地理教科書 (第3章)、モハマド・ユーノス・アブドゥッラー (Mohd. Eunos Abdullah) が編集するマレー語日刊紙『ウトゥサン・ムラユ (Utusan Melayu)』 (第4・5章) である。これらのテキストの革新性は、クラジャアンの正統性を覆しかねない諸概念、すなわち、民族 (バンサ) 意識を筆頭に、領域国家 (ヌグリ, negeri) の観念、ラジャ個人から切り離された非人格的な「クラジャアン=政府」という解釈、理性主義、個人主義、進歩史観などの革新的な諸概念を生み出した点にあるという。

第6章と第7章では、20世紀初頭、アラブのイスラーム改革思想の影響を受けたウンマ志向のジャーナリスト4人が編集した『アル・イマーム (Al Imam)』紙が考察の対象とされる。同紙は、理性をはじめとする個人の本質の重視、イスラーム共同体 (ウンマ) への奉仕、イスラーム法への服従などの主張を掲げて、クラジャアン体制に挑戦した。ウンマ志向は、理性主義や進歩史観を有する点ではバンサ志向と共通する部分があったという。

第8章では、バンサ志向やウンマ志向の挑戦を受けて、新たに自己改革に乗り出した20世紀初頭のクラジャアンのテキストとして、ハジ・モハマド・サイド (Haji Mohd. Said) の『ヒカヤット・ジョホール (Hikayat Johor)』が分析される。同書が従来のクラジャアンの歴史書とは決定的に異なっているのは、近代性の積極的評価、人種・民族 (バンサ) と領域国家 (ヌグリ) を単位とする世界観の受容、ラジャ個人と区別された「クラジャアン=政府」概念の採用、ラジャへの無条件の忠誠から業績主義に基

2) Roff, William R. 1994 [1967]. *The Origins of Malay Nationalism*, second edition. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

づく条件付きの忠誠への転換、等々のイデオロギー的革新を行っている点にあるという。

以上の植民地時代前期の議論を受けて、第9章と第10章では、植民地時代中期の1930年代以降の論争が俎上に載せられる。まず、ウンマ志向のテキストとして、サイード・シェイク・アルハディ (Sayyid Shaykh Al-Hadi) の『イスラームと理性 (*Islam dan 'Akal*)』が、続いて、クラジャアン志向のテキストとして、ラジャ・ロブ・アフマッド (Raja Lob Ahmad) が編集したペラのスルタン・アブドゥル・アジズの即位記が、それぞれ分析の対象となる (第9章)。ミルナーによれば、このふたつのテキストは、具体的な主張は異にしているものの、進歩や近代化、バンサの統一といった課題の設定や正当化の論理においては、もはやバンサ志向のリベラリズムの言説の枠組みのなかに取り込まれているという。最後に、イブラヒム・ヤーコブ (Ibrahim Yaacob) の『祖国を見る (*Melihat Tanah Ayer*)』は、一方で、マレー民族 (バンサ・ムラユ) とマレー人の国土 (タナー・ムラユ) とを感情的に結びつけ、バンサ志向のイデオロギーを発展・強化させるとともに、他方で、植民地経済体制に起因する経済的抑圧からのマレー人の解放に主眼を置く社会主義的なバンサ志向を打ち出し、個人主義のリベラリズムに立脚した既存のバンサ志向を修正した (第10章)。このような紆余曲折を経ながら、バンサ志向イデオロギーは、徐々に「ナショナリズム」としての内実を備えるようになっていった。

ミルナーの結論をまとめてみよう。第1に、具体的な主張のレベル、すなわち problematic なレベルにおいては、マレー人社会の諸イデオロギー——クラジャアン志向、バンサ志向、ウンマ志向——は相異なる共同体概念を掲げて対立を続けていた。しかしながら、第2に、論争で使用された語彙、問題設定、正当化原理などのレベル、すなわち thematic なレベルにおいて見るなら、相互に敵対するイデオロギーがますます共通の論争のルールのもとに議論を闘わせるようになってきた。その論争のルールとは、理性、進歩、平等、自由などの語彙、バンサの統一と発展という課題の設定、実証的な方法による議論の正当化など、もとはといえばバンサ志向が用意した議論の作法であった。このようにして、相異なる

理想の共同体像を掲げる複数の主体が、新しい共通のルールの下で公的な議論を重ねていく過程において、公衆 (public) が開かれた論争の場としての公共圏 (public sphere) が拡大していく。ここにミルナーは近代的な「政治」の創造を見るのである。

本書のマレー政治思想史研究への貢献は、第1に、ナショナリズムを相対化したうえで、ナショナリズムの出現の前提条件をなす近代的世界観の成立過程を追求したことにある。しかも、著者は、近代的世界観の形成を単なる西洋思想の一方的な伝播によって説明することを慎重に避け、マレー王権制に代表される内の論理と、ヨーロッパの啓蒙主義思想やアラブのイスラーム改革思想などの外の論理との相互作用の中に、植民地時代のマレー社会における近代的な政治空間の生成のダイナミズムを見ようとしている。第2の貢献は、政治的な議論のもつイデオロギー的統合作用を積極的に評価した点である。異なったイデオロギーのあいだの論争は、表面的には、個々の主張の相違を浮き彫りにすることによって相互の対立を激化させるように見えるけれども、深層においては、共通の語彙や主題、正当化原理などの共通の議論のルールを発達させることを通じて、対立を緩和し統合を促進する可能性を秘めている。

本書に関する問題としては、次のような諸点を指摘しておきたい。第1は、「植民地期マラヤにおける政治の創造」という本書の主題における「政治」の定義の問題である。「政治」を近代的概念としての政治に限定するミルナーの定義そのものに同意しない読者は、植民地時代に生じた変化は政治の「創造」ではなく、古いタイプの政治から新しいタイプの政治への転換、ないしは政治領域の拡大に過ぎないと感じるであろう。第2の問題は、論争を構成する諸々のイデオロギーのあいだの相互関係が明確ではない点である。そもそも、彼のいう「論争」とは、論者差し向かいの討論や同一の紙 (誌) 上での論戦ではなく、時代的にも空間的にも隔たった論者たちが各々のテキストを通じて間接的に行った (と推定される) 議論である。当事者が先行のテキストにどれほど影響を受けたかを実証的に跡づけるのは容易でない。そのため、個々のイデオロギーのあいだの連鎖関係についての説明は、推論的で仮説的な性格が

濃い。第3の問題は、イデオロギーの流通範囲や受容のされ方が明らかでない点である。すなわち、それぞれのテキストが誰によってどのように読まれ、いかなる反応を引き起こしたのか、という問いに対するミルナーの説明もまた、十分な裏付けを欠き、推測の域を出ていない。

以上のような問題点を考慮に入れても、植民地時代のマレー政治思想史の再考を促す問題提起の書としての本書の重要性は、依然として失われまいであろう。そればかりではない。本書の結論部分でミルナーが示唆しているように、本書の議論は、独立以降のマレーシア政治を考察する際の重要なヒントをも与えてくれるといえよう。もちろん、現代マレー

シア政治を論ずる場合には、新たな問題、たとえば、非マレー人をいかにして論争主体として取り込むべきか、テキストとしての政治思想と現実の政治行動をどのように接合するか、等々の課題が立ちはだかっている。いうまでもなく、本書はそのような問題に直接の解答を与えてくれるわけではない。しかし、ミルナーのひそみにならうというならば、彼の論を支持するか否かに関わらず、我々が本書を相手に真剣な対話や論争を挑むことは、現代マレーシア政治の構図を捉える視角と方法を身につけるうえでも、決して無益な作業ではないであろう。

(左右田直規・京都大学人間・環境学研究所)